

詩人の成長と初期の詩の影響

——クラスタ分析によるコウルリッジの初期の詩と後の詩の関連の考察——

橋 本 健 広

The Poetry of Growth and Effect of Early Poems : The Relationship between Coleridge's Early and Later Poems Using Cluster Analysis

Takehiro HASHIMOTO

Abstract

This article aims to investigate the relationship between selected early poems and later poems of the Romantic poet Samuel Taylor Coleridge using a quantitative method of cluster analysis. The early poems are "Joan of Arc", "Osorio", and four shorter blank-verse poems, as Coleridge mentioned in *Biographia Literaria*. A total of 293 poems are computed using the *tf-idf* weighting scheme and cluster analysis, with some tables colored by year data. The paper found that all the poems are categorized into three types : major poems, lyrical poems, and minor poems. It also found that the major poems are divided into dramatic poems, mature poems, and famous poems. Several early poems are found in the same clusters as some later poems. For example, "The Dungeon" is in the same category as "Tell's Birth-Place", in 1799 and "Lines" in 1826 sharing the same idea of friendless solitude, or "Joan of Arc" is categorized in the same cluster as "France an Ode", "Hymn to the Earth", and "Hymn before Sunrise" sharing the same concern of how to reconcile the feeling with the idea. The paper also found that conversational poems fall within the same category. The paper concluded that early poems may affect the later poems, though there are still several points of concern.

Key Words

Coleridge, Cluster Analysis, Poetry Relationship, Digital Humanities

4. 結 果
5. 考 察
6. おわりに

目 次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 方 法
- 3.1 テキスト
- 3.2 モ デ ル
- 3.3 分析 方法

1. はじめに

19世紀イギリス・ロマン派の詩人サミュエル・テイラー・コウルリッジは、後に詩人としての自己の成長を次のように述懐する。

そして私が二十四歳と二十五歳のときの作品（たとえば短い無韻詩や、サウジー氏の

『ジャンヌ・ダルク』初版の第二巻の中の詩行で、この作品集においては「諸国民の運命-幻想 (The Destiny of Nations: a Vision 1817)」の序にあたる部分に採用されているもの、そして悲劇『悔恨 (Remorse, 1812)』は、文体の全体的な構成・感触において、私のごく最近の作と比べても、私の現在の理想にそれほど及ばないとは思えないのです。(BL 1: 25-26; 日本語訳『文学自叙伝』23-24)

コウルリッジが『文学自叙伝』を執筆していたのは1815年である。コウルリッジは若い時期に作ったいくつかの詩が後年においても詩の理想として完成に近いことを述べ、その詩を具体的にいくつかあげている。ここでコウルリッジが念頭においている理想的な詩とは、ボールズとクーパーの作品に認められた、「心と頭を調和させた」詩 (BL 1: 25), すなわち思想と感情が有機的に結びついた詩のことである。理想とした詩が若い時期にあるということは、それまでの習作期の詩と決別し、素人であった詩人が自立した詩人へと変わった出発点とみることができないだろうか。コウルリッジが理想とした思想と感情が有機的に結びついたロマン主義的な詩を、24, 25歳すなわち1796年, 1797年の時点の詩にたどることができるのであれば、それらの詩は、1797年, 1798年の「驚異の年」と呼ばれる詩才の開花期を経て、後年に至るまで影響を与え続けた可能性がある。本稿の目的は、コウルリッジが詩の理想として若い時期に完成させた数編の詩および劇が、後年の詩に影響を与えているか、すなわち初期のすぐれた詩と後年の詩との関連を、クラスト分析の量的手法を使って探求を試みることである。

コウルリッジが冒頭の引用であげた若き日の理想的な詩 (以下本稿では「若き日の詩」と述べる) とは、プリンストン版のメイズの註によれば、次の6編の詩、劇そして詩の断片である。すなわち、4編の無韻詩「もう詩を書かないと宣言した友へ」To a Friend Who had Declared His Intention of Writing No More Poetry」, 「ジョージ・コウ

ルリッジ師へ」To the Rev. George Coleridge」, 「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」This Lime-Tree Bower My Prison」, 「土牢」The Dungeon」および、ロバート・サウジーの劇『ジャンヌ・ダルク Joan of Arc』第2巻の1-266行の断片 (以下「ジャンヌ・ダルク」Joan of Arc」と述べる) と劇詩『オソーリオ Osorio』である。『文学自叙伝』で『悔恨』と述べられている詩は、1796年時点のテキストとしては『オソーリオ』を意味する。

1796年から1797年の若き日の詩を位置づけると、習作期を終え、「驚異の年」と呼ばれるイギリス文学史に残るすぐれた詩をいくつも書いた時期の前のわずかな時期にあたるといえる。1796年4月にコウルリッジは処女詩集『さまざまな主題についての詩集』を出版する。この詩集は、コウルリッジが『文学自叙伝』で「少年期の詩の小作品集」(BL 1: 5) と述べているが、少年期ではなく、23歳前後の詩であり、また処女作品ということもあって出版社のジョセフ・コトルが制作にかなりかかわった詩である (Fairer 2009: 160-161)。この時期までは習作期とみてよいであろう。その後、1797年11月より1798年5月ごろにかけてコウルリッジの代表作である3編の物語的幻想詩が書かれる。たとえば、「老水夫の歌」は1797年11月-1798年3月23日の間 (その後1800年-1830年にかけて改訂。制作年代はプリンストン版の註に依拠する), 『クリスタベル』は1798年2月-4月および1800年8月-10月に書かれている。また「クブラ・カーン」は1797年9月-11月もしくは1798年3月もしくは1799年10月に書かれたのではないかと考えられている。

若き詩の多くはこの1796年4月から1797年11月の間に書かれている。「友へ」は1796年9月, 「ジョージ・コウルリッジ師へ」は1797年5月, 「土牢」は1797年4月から9月, 「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」は1797年7月, 『オソーリオ』は1797年2月-10月16日である。「ジャンヌ・ダルク」のみ、1795年5月-9月 (「諸国民の運命」として1796年10月-1797年1月に

改編、その後1815年に改訂）であり、処女詩集を出版準備していた時期と重なる。しかしながら、若き日の詩の執筆時期はコウルリッジの習作期の終盤からその後にあたり、この時期に1人の詩人として自立し、作風と主題をひとまず確立し、後に詩才を開花させる基礎を築いた時期とみなすことができるだろう。こうしてロマン主義的な詩として自立した若き日の詩が、後の詩といかにかかわるかは、興味深いテーマである。本稿では、1人の詩人の一生にわたって詩の後付けを試みるため、精読によらず、詩をデータとしてとらえた量的分析を試みる。

2. 先行研究

ロマン派詩人の詩の影響についての研究は数多く、他の詩人との関係を調べる研究や、1人の詩人の詩の変遷を調べる研究がなされてきた。このうち、1人の詩の変遷を調べる研究では、詩人の思想や信条の変化、アイデンティティの確立、あるいはテキスト自体の不確定性といった観点から研究がなされている。たとえば批評家デービッド・フェアラー（2009:160-191）はコウルリッジの初期の詩『さまざまな主題についての詩集』を逐次的に読み解き、若い詩人として処女作を作りはじめたばかりのコウルリッジが、公の詩人として詩の体現の問題に躊躇しながらも歩みを進め、ある全体的な形式を獲得するまでを示す。あるいは、批評家ポール・マグヌーソン（2000:ページ数記載なし）は、何度も書き換えられた「チャタンの死を懐む哀歌」から、コウルリッジの政治的な信念と詩人としての感情の揺れ動きを読み解く。詩のテキストを精読しつつ、思想的あるいは歴史的な背景や詩の主題の変化を交えて詩の変遷を読み解く研究が多くみられる。

一方、精読から離れた詩の研究もなされてきた。日本語で人文情報学と呼ばれるデジタル・ヒューマニティーズの研究は、フランコ・モレッティの『遠読』（Moretti 2013）に代表される量的解釈の試み以降、コンピュータを使用した分析を発展させてきた。コンピュータを使用した試みは

1949年のトマス・アクイナスのコンコーダンスの作成にはじまるとされ、それ以降イギリス・ロマン派の分野では、各種作品の電子テキスト化や、メアリー・リン・ジョンソンとジョン・E・グラントによるブレイクのテキストと図版をコンピュータ上で組み合わせる1980年代前半の試み、あるいはJ・F・パローによるコンピュータを使用したジェーン・オースティンの文体分析などが行われてきた（2016:ページ記載なし）。

デジタル・ヒューマニティーズの文学研究にはさまざまな研究があり、研究活動の分類は多岐にわたるが（TaDiRAH 出版年記載なし）、大別して次の3つの研究活動が可能であるといえる。デジタル資料を拡充する研究、文学研究に新しい視点を提供する研究、デジタル上でしか成しえない全く新しい研究分野を開拓する研究の3つである（*Digital Humanities* 2016:154）。具体的には、テキスト分析研究や作家や作品の関連を調べる研究、あるいは作者同定研究などをあげることができるだろう。

デジタル・ヒューマニティーズの方法論を位置づけると、データ収集が客観的で、分析が主観的という研究と考えられる。基本的には文学テキストをデータをしてとらえ、さまざまな計算を行い、さらなるデータを導き出したり、あるいは人間にわかりやすいように可視化したりする。批評家ジェームズ・E・ドブソンが指摘するように、データの選択やモデルの生成は人の主観によって決定されるためである（2019:968-979）。いいかえれば、どのように作品をみたいかという視点をモデルや計算式にあてはめるのがコンピュータを使用した分析の特徴である。モデルや計算式が変われば導きだされるデータや図は異なるものになる。また当然ながらその後の解釈は著者の主観的な解釈となる。デジタル・ヒューマニティーズの方法論とは、文学理論におけるリベラル・ヒューマニズム批評や構造主義、ポスト構造主義、新歴史主義といった各種の理論と同列の、1つの解釈の方法であるといえる。デジタル・ヒューマニティーズにおけるコンピュータを使用した分析は、

1つの作品の見方を投影した結果であり、そのようなものととらえたうえで、以下コウルリッジの若き日の詩の後年の詩への影響を調べる。

3. 方 法

3.1 テキスト

対象とするテキストは、アーネスト・ハートリー・コウルリッジ編による、コウルリッジのオックスフォード版の全詩集であり、第1巻に収められた1787年の「復活祭の休暇"Easter Holidays"」から1833年までの「碑文"epitaph"」までの詩と、第2巻に収められた『ロベスピエールの失墜』から『ザポーリア』までの劇詩である。これに、ロバート・サウジの『ジャンヌ・ダルク』に収められたコウルリッジの詩編「ジャンヌ・ダルク」を加え、合計293編の詩をテキストとした。オックスフォード版の詩は、プロジェクト・グーテンベルグに収められたウェブ上の電子テキストをデジタル化されたデータとして使用した。また「ジャンヌ・ダルク」は、プリンストン版のテキストを著者がデジタル化したものをデータとして使用した。

3.2 モデル

コウルリッジが理想とする心と頭を調和させた詩、すなわち思想と感情が融合した詩とは、広範な意味での想念と感情の吐露を示す表現が自然に有機的に入り混じった詩のことである。それは「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」にみられるように、友への思いと自己の追憶や感情が自然に溶け合う場合であったり、哲学的かつ宗教的な思想がロマン派的な想像力と結びつく場合であったりする。たとえば、「ジャンヌ・ダルク」の一節は次のようになる。

Yet the wizard her,
Arm'd with Torngarsuck's power, the Spirit
of Good,
Forces to unchain the foodful progeny
Of the Ocean stream. Wild phantasies! yet

wise,

On the victorious goodness of high God
Teaching Reliance and medicinal Hope,
'Till, from Bethabara northward, heavenly
Truth

With gradual steps winning her difficult way
Transfer their rude Faith perfected and
pure. (PW1, 1:215)

しかし、トルンガルサックの力で武装した、
善の精霊であるその魔法使いは、
大海の海流の食物に満ちた子孫たちを
[凶暴な姿の悪の魔女に] 解き放たせた。
妖しく、しかし賢明な幻想だ！
その幻想は、至高なる神の
満ち足りた善良さをよりどころとすることを
教え、
また癒しの希望を教えるもので、
やがて北方のベタバラから、天の真理は
困難な道を勝ち進みながら、ゆっくりと歩み
を進め、
彼らの[グリーンランド人の] 粗野な信仰
を、完全で純粋なものにする
(筆者訳。[]内は訳語を補った。以下同様)

詩人はグリーンランドの神話を取りあげ、海底の邸宅に住み海の生き物を閉じ込めてしまう悪の魔女に対し、善の魔法使いが生き物を解放させるという英雄的な逸話を語る。ここでコウルリッジは、神話を熱情に似た迷信的な感情として描写し、その感情を「妖しい賢明な幻想」としてロマン派的想像力へと変える。その後、想像力はキリスト教にもとづく啓蒙思想を融合することでさらに変容を加えている。

この思想と感情が融合したテキストをデータとして他の詩と比べるためには、単一の語句の重要度の分布を比較するのが適切であると思われる。2語以上の語句の連なりを使用するのはおそらく適切ではない。たとえば"gradual steps"といったある程度形式化した語の連なりと異なり、"foodful progeny", "Wild phantasies", "medicinal

Hope”といった語句は意味のかけ離れた形容詞と名詞の組み合わせであり、この詩のこの場所であり適切でない表現である。とりだす語句は1語にとどめるべきと考える。また思想と感情の融合の特徴を抽出するには、語の重要度の分布からある程度の詩のイメージが押さえられると考える。

そこで、ベクトル空間モデルを採用し、各用語について *tf-idf* の重みをもったベクトルで各詩の文書を表す。ベクトル空間モデルは同じクラスの文書は連続した領域を形成するという連続性仮説のうえに成り立っている (マニング, ラグァヴァン, シューチェ 2012: 258)。そのため、この詩の文書ベクトルを、ユークリッド距離による階層的クラスタリングで分類し、若き日の詩と連続した領域におさまる後続の詩を調べる。

3.3 分析方法

重み付けに用いる *tf-idf* は、スケーリングなどを行わず、各用語の頻度に、コレクションの文書の総数を用語の文書頻度で割ったものの対数をかけた *tf-idf* の基本式を使用した。

各詩のデータは、不要な文字を取り除いて前処理を行った後、*tf-idf* ベクトルに変換する。言語として Python を用いた。*tf-idf* を用いるため、ストップワードの除去は行わない。また詩の語感を残して比較するため、見出し語化も行わない。ワード法により、ユークリッド距離を用いてクラスタリングを行った後、系統樹を作成した。

便宜上コウルリッジの詩を初期 (1772 年-1795 年)、開花期 (1796 年-1798 年)、衰退期 (1799 年-1806 年)、後期 (1807 年-1833 年) と 4 つの時期に分け、色分けした詩の表を作成して、若き日の詩が後続の詩と関係するか、同じ領域に含まれるかを分析した。コウルリッジの習作期を初期、自立しすぐれた詩を書いた時期を開花期、詩才の枯渇を嘆く詩「失意の頌詩 "Dejection an Ode"」(1802 年) を含む時期を衰退期、ワーズワスが『序曲』を朗読するのを聞いて深い感銘を受け、再び自立して詩作に取り組む時期を後期とした。

4. 結 果

コウルリッジの 293 編の詩を *tf-idf* で重みをつけてクラスタ分類したところ、大きく分けて 3 つのクラスタができた。表 1 は各詩のクラスタ分類を示している。詩の識別番号は、電子データのテキストに掲載された順の番号である。「ジャンヌ・ダルク」は 293 番としている。若き日の詩には詩の識別番号の前に黒丸を付した。

クラスタ 1 は 81 編の詩からなり、「老水夫の歌」をはじめとするコウルリッジの主要作品が含まれているため、これを「主要作品群」と名づけた。若き日の詩を 5 編含む。クラスタ 2 は 90 篇の詩からなるが、半数以上の 57 篇が 1795 年までの詩である。そのため「初期作品群」と名づけた。なお 12 編の後期の詩を含む。クラスタ 3 は 122 編の詩からなる。全体的にマイナーな詩が多く、制作年もさまざまであるが、ソネットや愛の詩、誰かに寄せて歌う詩や感情の吐露を歌う詩が多いことから、「抒情詩群」と名づけた。この 3 つのクラスタのうち、クラスタ 3 は若き日の詩を含まないため分析から省く。またクラスタ 2 も「友へ」1 編を含むのみであるため、本稿ではあつかわない。「友へ」もプリンストン版の註では若き日の詩に含まれるとされるが、コウルリッジは若き日の詩を「無韻詩 "the shorter blank verse poems" (BL 1:25)」とのみ述べており、「友へ」が含まれるかどうかは不明のためである。若き日の詩を多く含む主要作品群を主に分析する。

図①は、主要作品群の系統樹である。詩どうしの距離が近いほど樹形図で近くにまとめられている。 x 軸は距離による類似度である。若き日の詩のタイトルの前には黒丸を付した。また表 2 は主要作品群のタイトルと制作年代、語数の表である。図 1 の系統樹と同じ順番で並べている。表 2 は色分けを行い、タイトル部分については 3 つの下位クラスタ (ID 210 番から 128 番の 15 編の詩、260 番から 134 番の 32 編の詩、192 番から 176 番の 33 編の詩) に応じて背景色を変えている。また年代は時期ごとに背景色を変えた。以下主要作品群内の

表 1: コウルリッジの詩のクラスタ分類。識別番号はテキストの掲載順。292 番は「ジャンヌ・ダルク」。黒丸は若き日の詩を示す。

クラスタ	ラベル	詩の識別番号
1	主要作品群 <div> 劇・対話詩 円熟期の詩 代表作の詩 </div>	6, 61, 63, 78, 99, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 108, 116, 118, 121, 122, ●125, ●128, 129, ●130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 141, 142, 143, 144, 147, 148, 149, 150, 156, 164, 166, 170, 172, 173, 175, 177, 179, 181, 183, 184, 190, 191, 193, 197, 199, 201, 209, 211, 215, 220, 222, 223, 229, 231, 239, 247, 249, 253, 254, 256, 259, 261, 263, 268, 283, 287, ●288, 289, 290, 291, 292, ●293
2	初期作品群	2, 5, 8, 10, 12, 13, 15, 19, 22, 23, 24, 26, 27, 30, 31, 34, 36, 38, 40, 41, 42, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 52, 53, 55, 62, 64, 65, 67, 69, 70, 71, 72, 73, 75, 76, 77, 79, 81, 82, 85, 86, 88, 89, 91, 92, 94, 95, 96, 97, 100, 107, 110, 112, 113, 117, ●120, 123, 126, 151, 152, 155, 157, 163, 167, 171, 174, 180, 185, 186, 192, 200, 203, 232, 233, 234, 236, 238, 240, 241, 243, 245, 251, 255, 284
3	抒情詩群	1, 3, 4, 7, 9, 11, 14, 16, 17, 18, 20, 21, 25, 28, 29, 32, 33, 35, 37, 39, 43, 50, 51, 54, 56, 57, 58, 59, 60, 66, 68, 74, 80, 83, 84, 87, 90, 93, 98, 109, 111, 114, 115, 119, 124, 127, 140, 145, 146, 153, 154, 158, 159, 160, 161, 162, 165, 168, 169, 176, 178, 182, 187, 188, 189, 194, 195, 196, 198, 202, 204, 205, 206, 207, 208, 210, 212, 213, 214, 216, 217, 218, 219, 221, 224, 225, 226, 227, 228, 230, 235, 237, 242, 244, 246, 248, 250, 252, 257, 258, 260, 262, 264, 265, 266, 267, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 285, 286

下位のクラスタについて記述する。

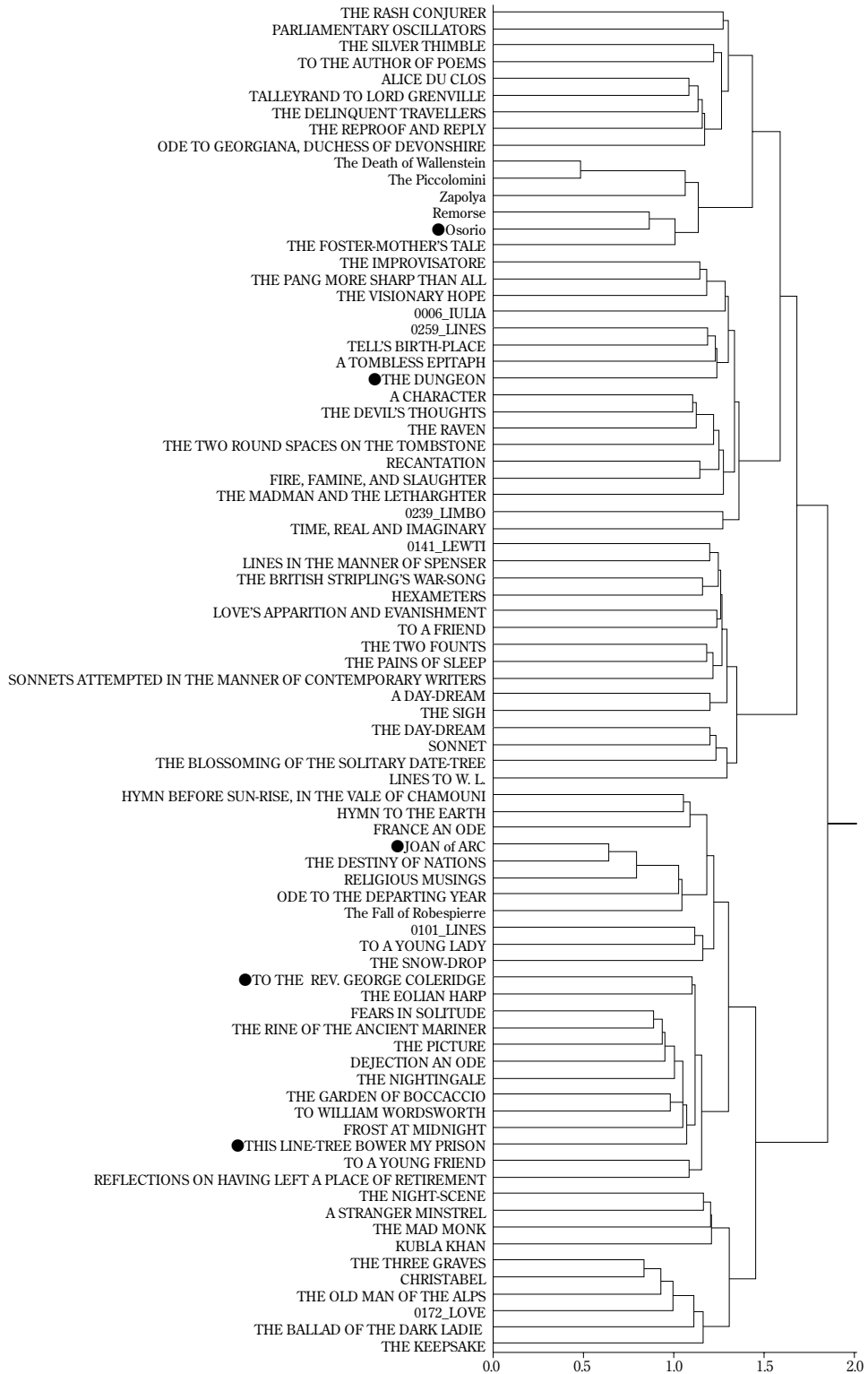
『オソーリオ』を含むクラスタ（210 番から 128 番の 15 編の詩）は、シラーの劇作品の翻訳である『ヴァレンシュタインの死』、『ピッコローミニ父子』、そしてコウルリッジの劇詩『ザポーリア』、『悔恨』など、主に演劇作品から構成されている。「養母の逸話」は『オソーリオ』の一部である。またその上のクラスタにみられる「軽率な魔法使い」「タリーランドからグレンビル侯爵へ」といった詩は劇の一部であり、「議会の振動隊」、「意見と返答」は政治的かつ対話的な内容の詩である。そこで、『オソーリオ』を含む「軽率な魔法使い」から「養母の逸話」までの詩のクラスタをまとめて「劇・対話詩」と名づける。

「土牢」を含むクラスタ（210 番から 128 番の 15 編の詩）は、衰退期および後期の作品が多いため、「円熟期の詩」と名づける。内容上の傾向は一瞥ではわからない。「土牢」と最も近い 3 編の詩は、模倣詩あるいは昔の人の言葉に感銘を受けて作った詩である。

「ジャンヌ・ダルク」、「ジョージ・コウルリッジ師へ」、「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」を

含むクラスタ（192 番から 176 番の 33 編の詩）は、コウルリッジの代表作や少なからず有名な詩が多い。そこで「代表作の詩」と名づける。キリスト教の救済を主題とする物語的幻想詩「老水夫の歌」以外に、会話詩（Harper 1975）と呼ばれる「アイオロスの堅琴」、「孤独の不安」、「失意の頌詩」、「さよなき鳥-会話詩」、「ウィリアム・ワーズワースへ」、「深夜の霜」、「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」、「隠遁の地を去るにあたって思う歌」が含まれる。

表 3 は、コウルリッジの全作品の各時期における制作数とその割合、および主要作品群における時期ごとの制作数とその割合である。また各時期における制作数に応じた主要作品群内での割合も示している。コウルリッジが作品を制作した数は、どの年代で時期を分けるかにもよるが、初期が最も多く 36.7% であり、開花期は 3 年と短い。全体の 14.5% となっている。衰退期は 23.5%、後期は 25.3% である。主要作品群内での各時期の割合は、初期が 16.0% と少なく、開花期が 32.1% と多い。衰退期は 28.4%、後期は 23.5% である。そもそもの数が異なるため、クラスタ内



図① 主要作品群の系統樹 (N=81). 黒丸は若き日の詩.

表2 主要作品群の題名および年代。順番は系統樹と同じ。色分けは、詩の題名は色が薄いほど近くのクラスター、年代の色分けは表3の時期別の識別色と同じ。

ID	タイトル	制作年	語数
211	THE RASH CONJURER	1805	357
133	PARLIAMENTARY OSCILLATORS	1798	353
104	THE SILVER THIMBLE	1795	498
103	TO THE AUTHOR OF POEMS	1795	363
263	ALICE DU CLOS	1828	1248
175	TALLEYRAND TO LORD GRENVILLE	1800	1073
249	THE DELINQUENT TRAVELLERS	1824	833
247	THE REPROOF AND REPLY	1823	527
173	ODE TO GEORGIANA, DUCHESS OF DEVONSHIRE	1799	564
290	The Death of Wallenstein	1800	22127
289	The Piccolomini	1800	31316
292	Zapolya	1815	18348
291	Remorse	1812	17787
288	●Osorio	1797	17007
129	THE FOSTER-MOTHER'S TALE	1797	720
261	THE IMPROVISATORE	1827	567
256	THE PANG MORE SHARP THAN ALL	1825	488
223	THE VISIONARY HOPE	1810	234
6	JULIA	1789	270
259	LINES	1826	293
156	TELL'S BIRTH-PLACE	1799	193
220	A TOMBLESS EPITAPH	1809	286
130	●THE DUNGEON	1797	223
253	A CHARACTER	1825	614
166	THE DEVIL'S THOUGHTS	1799	489
122	THE RAVEN	1797	392
183	THE TWO ROUND SPACES ON THE TOMBSTONE	1800	295
149	RECANTATION	1798	855
136	FIRE, FAMINE, AND SLAUGHTER	1798	568
222	THE MADMAN AND THE LETHARGIST	1809	285
239	LIMBO	1817	313
229	TIME, REAL AND IMAGINARY	1812	81
141	LEWTI	1798	535
99	LINES IN THE MANNER OF SPENSER	1795	394

164	THE BRITISH STRIPLING'S WAR-SONG	1799	271
150	HEXAMETERS	1798	419
283	LOVE'S APPARITION AND EVANISHMENT	1833	237
78	TO A FRIEND	1794	257
254	THE TWO FOUNTS	1826	398
201	THE PAINS OF SLEEP	1803	321
132	SONNETS ATTEMPTED IN THE MANNER OF CONTEMPORARY WRITERS	1797	370
197	A DAY-DREAM	1802	280
61	THE SIGH	1794	168
199	THE DAY-DREAM	1801	262
116	SONNET	1796	119
209	THE BLOSSOMING OF THE SOLITARY DATE-TREE	1805	259
135	LINES TO W. L.	1797	111
193	HYMN BEFORE SUN-RISE, IN THE VALE OF CHAMOUNI	1802	648
170	HYMN TO THE EARTH	1799	393
138	FRANCE AN ODE	1798	814
293	●JOAN of ARC	1796	1427
108	THE DESTINY OF NATIONS	1796	3498
106	RELIGIOUS MUSINGS	1794	3094
121	ODE TO THE DEPARTING YEAR	1796	1127
287	The Fall of Robespierre	1794	6157
101	LINES	1795	572
63	TO A YOUNG LADY	1794	364
184	THE SNOW-DROP	1800	398
125	●TO THE REV. GEORGE COLERIDGE	1797	611
102	THE EOLIAN HARP	1795	490
142	FEARS IN SOLITUDE	1798	1739
131	THE RIME OF THE ANCIENT MARINER	1797	3877
191	THE PICTURE	1802	1431
190	DEJECTION AN ODE	1802	1104
143	THE NIGHTINGALE	1798	847
268	THE GARDEN OF BOCCACCIO	1828	897
215	TO WILLIAM WORDSWORTH	1807	860
137	FROST AT MIDNIGHT	1798	568
128	●THIS LIME-TREE BOWER MY PRISON	1797	615
118	TO A YOUNG FRIEND	1796	596
105	REFLECTIONS ON HAVING LEFT A PLACE OF RETIREMENT	1795	574

231	THE NIGHT-SCENE	1813	682
181	A STRANGER MINSTREL	1800	502
179	THE MAD MONK	1800	347
148	KUBLA KHAN	1798	422
144	THE THREE GRAVES	1797	3317
134	CHRISTABEL	1801	4538
139	THE OLD MAN OF THE ALPS	1798	1157
172	LOVE	1799	588
147	THE BALLAD OF THE DARK LADIE	1798	394
177	THE KEEPSAKE	1800	309

での割合を出しても全体でどのくらいを占めるのかわかりにくい。そのため、時期ごとの総数における主要作品群内での割合を算出した。主要作品群として分けられたクラスタ内には、開花期の作品が61.9%となった。衰退期は衰退期全体における33.8%、後期は後期全体における26.0%が主要作品群として分類された。衰退期、後期の詩のうち、かなりの割合が主要作品群に分類されていることがわかる。

5. 考 察

コウルリッジの若き日の詩は、後年の詩に影響を与えているだろうか。表3における割合をみたとき、主要作品群においては衰退期、後期の詩が数多く含まれていることからその可能性は十分に考えられる。主要作品群において下位クラスタを具体的にみると、それぞれに特徴があることがわ

かる。

『オソーリオ』は、『悔恨』、『養母の逸話』と距離に近いが、これらは同じ劇詩である。『オソーリオ』はシェリダンの求めに応じて1797年にコウルリッジが書いた劇詩であるが、採用を見送られたため、登場人物や多くの部分を改編、追加して後に『悔恨』を作ったという経緯がある。『ヴァレンシュタインの死』と『ピッコローミニ父子』はシラーの翻訳である。そのため内容面での類似性は考えられない。距離に近い理由は、語数が他の詩と比べて多いためか、もしくは劇や劇のような作品がまとまっていることから、劇に特有の表現が含まれるためだろう。おそらくそれは、次のような話し言葉の多さであると思われる。『ヴァレンシュタインの死』第1幕第1場冒頭はこうはじまる。

表3 コウルリッジの全作品および主要作品群の詩の数と割合

識別色	時期	制作年代	全体	割合	主要作品群内の数	割合	時期ごとの総数における主要作品群内での割合
	初期	1772-1795	106	36.7%	13	16.0%	12.3%
	開花期	1796-1798	42	14.5%	26	32.1%	61.9%
	衰退期	1799-1806	68	23.5%	23	28.4%	33.8%
	後期	1807-1833	73	25.3%	19	23.5%	26.0%
	小計		289	100%	81	100%	

Countess (watching them from the opposite side). So you have nothing, niece, to ask me? Nothing?

I have been waiting for a word from you.

And could you then endure in all this time

Not once to speak his name?

伯爵夫人（反対側から〔テクラとノイブルン夫人を〕みながら）

あなたからの言葉をずっと待っているのです
なのにあなたはその間ずっと

彼の名前をいうまいと耐えているのですか。

(CPW 2:726)

こうした話し言葉は劇に固有のものである。しかしながら、話し言葉だけでは、劇詩が重なる理由にはならない。内容的な同一性もおそらくかわっている。『オソーリオ』の養母の逸話で、養母の夫が子を見つけたときの話は、『ザポーリア』にも引き継がれている。『オソーリオ』で養父は木の陰に子供をみつける。

Beneath that tree, while yet it was a tree,
He found a baby wrapt in mosses, lined
With thistle-beards, and such small locks of wool

As hang on brambles. Well, he brought him home, (CPW 2:572)

あの木の下で、それはまだ木でしたが
夫はこけにくるまれた子供をみつけたのです。

アザミののぎと、キイチゴにかけるような
小さな羊毛の房を詰め込まれていました。そう、夫は子供を家に連れ帰ったのです。

こけにくるまれた赤子は、1816年に書かれた『ザポーリア』では櫟の木の穴にくるまれている。

Bathory

Led by a cry, far inward from the track,
In the hollow of an oak, as in a nest,

Did find thee, Bethlen, then a helpless babe.
The robe that wrapt thee was a widow's mantle. (CPW 2:912)

バスリーは、泣き声に導かれて、けもの道から

ずっと中に入り、櫟の木の穴の中に、まるで
巣の中にいるような、

ベスレン、おまえを、その時はたよりない赤子
をみつけたのです。

お前をくるんでいた衣は未亡人の外套でした。

ここにみられるのは、主要な登場人物が、幼い頃森の中に捨てられており、みつけた人が養ったという出自の逸話である。劇詩においては筋の点で若き日の詩が引き継がれているのかもしれない。

次にみる「土牢」は『オソーリオ』の一部であるが、後続のいくつかの詩に詩のイメージを提供している可能性のある個所がある。「土牢」と近い位置にある詩は、1809年作の「墓のない墓碑」1799年作の「ウイリアム・テルの生地」、1826年作と推測される「ベレンガリウスの最後の言葉に示唆を受けて詠める歌」などの詩である。このうち、最後の詩との関連をみても、「土牢」の詩で、主人公アルバートは土牢の中に入り、土牢に閉じ込め作業させられるものの悲惨さを嘆く。

uncomforted

And friendless solitude, groaning and tears,
And savage faces, at the clanking hour,
Seen through the steams and vapour of his dungeon,

By the lamp's dismal twilight! (CPW 1:185)
居心地悪く、友のない孤独のうちにあり、うめき泣く。

そして野蛮な顔は、ガチンガチンとなる時間
に

土牢の蒸気と湯気を通してうかびあがる
ランプの陰鬱な薄明かりによって！

この「土牢」の暗闇の中の孤独なイメージは、「ベレンガリウスの最後の言葉に示唆を受けて詠める歌」に引き継がれている。詩人は11世紀のキリスト教神学者ベレンガリウスの孤独な境遇を案じている。

That age how dark! congenial minds how rare!

No host of friends with kindred zeal did burn!
No throbbing hearts awaited his return!
(CPW 1:461)

あの時代はなんと暗い時代であったことか。
気心の知れた人は
なんとまれであったことか。同じような情熱
を燃やした友人たちはいなかった。
誰も胸の鼓動を高鳴らせながら彼の帰りを待
たなかった。

「土牢」では物理的な閉所と暗さの中で友のない孤独を描くが、「ベレンガリウスの最後の言葉に示唆を受けて詠める歌」では自己を取り巻く暗い世界と、同じ意識を共有することのない友のない孤独に展開される。『オソーリオ』および『オソーリオ』の一部である「土牢」は、かなり後の詩にまで影響を及ぼしている可能性がある。

次に「ジャンヌ・ダルク」を取りあげる。この詩と近い詩は、1798年作の「フランス—頌詩」、1799年作の「大地への賛歌」、1802年作の「シャモニー谷で夜明け前に詠める賛歌」である。「ジャンヌ・ダルク」は難解な詩である。コウルリッジが理想とした感情と思考が溶け合う詩において、思考は必ずしも具体的あるいは個別的な思考を意味しないが、この詩では哲学的かつ宗教的な思想を意味する。「ジャンヌ・ダルク」の中で、詩人は世界の理である霊的精神（"Spirit"）を登場させ、その機能や性質について詳述する。霊的精神は万物をすべる存在で、自然の被造物に各々の役割と自己中心的な目的を与え、永遠の善の過程を発展させるという全体の統一性を保ちながら各々の被造物を動かす。

Some nurse the infant diamond in the mine;
Some roll the genial juices thro' the oak;
Some drive the mutinous clouds to clash in
air; (PW 1:213)

あるものは鉱山でダイヤモンドの原石をいつくしみ

あるものは樅の木から温和な汁をださせ
あるものは荒れ狂う雲を大気で衝突させる

ここでみられるのは、超越的な存在が自然の事物と関わる様子である。超越的な存在は、自然の事物に働きかけ、自然を動かす。やがて自然を働かせる霊的精神の理は、戦争の無意味さをジャンヌ・ダルクに教えて、怒りという感情と結びつく。「フランス—頌詩」では、霊的精神に代わり、自由が自然と一体化する。自由は失われた自らの境遇を嘆いている。詩人はかつて自由を裏切ったことの許しを請う。

Forgive me, Freedom! O forgive those dreams!

I hear thy voice, I hear thy loud lament,
From bleak Helvetia's icy caverns sent—
(CPW 1:246)

許しておくれ、自由よ。あれらの夢を許しておくれ。

私はおまえの声を聞く。私はおまえの声高な嘆きを聞く

荒涼としたヘルヴェチアの氷の洞窟から送られる嘆きを。

ここでは声をあげて嘆く自由は、フランスの国境を越えたスイスの氷の洞窟と一体化している。一体化という形で思考は自然となり、詩人の自由に対する謝罪の感情と融合する。「大地への賛歌」では、超越的存在である緑の髪をした女神である自然に詩人は語りかける。

Playful the spirits of noon, that rushing soft
through thy tresses,

Green-haired goddess! refresh me; and
hark! as they hurry or linger,

Fill the pause of my harp, or sustain it with
musical murmurs. (CPW 1:328)

昼の精霊の戯れを、かれらはおまえの髪の中
をやさしく駆け抜ける

緑の髪をした女神よ、私を元気にしてくれ、
そして聞いてほしい、

かれらがはしったり彷徨したりするとき、私
のハーブが止まった時を満たし、

あるいは音楽的なささやきでつないでほしい
のだ、

擬人化された自然と精霊は、走ったり止まったり、語りかけるといふ活動を通して、自らを元気づけてほしいという詩人の感情と融合している。「シャモニー谷で夜明け前に詠める賛歌」では、超越的な存在である神は、自然に働きかける存在である、

God! let the torrents, like a shout of nations,
Answer! and let the ice-plains echo, God!
God! sing ye meadow-streams with gladsome
voice! (CPW 1:379)

神よ、急流に、国民の叫びのように、
答えさせておくれ、氷の平原をこだまさせて
おくれ、神よ、

神よ、草地の流れに、喜ばしい声で歌わせて
おくれ、

詩人は神に語りかけ、自然の急流や氷の平原や草地の流れに働きかけることを望む。「ジャンヌ・ダルク」からみた超越的な存在との関わりは、霊的精神であれ、自由であれ、自然であれ、神であれ、自然の事物に働きかけたり一体化したりして、詩人の感情と融合することである。それは「ジャンヌ・ダルク」にすでに現れ、後に連綿と続く感情と思考の融合の詩である。いいかえれば、「ジャンヌ・ダルク」で確立された哲学的かつ宗教的な思考と感情との融合が、後続の詩に影

響を与え続けている例かもしれない。しかしながら、「ジャンヌ・ダルク」と他の詩の関連が認められるのは、クラスタ分類からは数年後の1802年ごろまでである、

1797年に作られた「ジョージ・コウルリッジ師へ」と「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」の2つの詩は同じクラスタ内にある。全部で13編の詩からなるこのクラスタの詩のうち8編がハーパーが会話詩と呼んだ詩であることは特筆に値する。ハーパーは詩の内容から8編の詩を選んだが、量的分析で明確に類似が認められるほど似ていたようである。8編の詩のうち、「アイオロスの堅琴」と「隠遁の地を去るにあたって思う歌」は若き日の詩の制作より前の1795年の詩である。「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」は1797年、「孤独の不安」、「深夜の霜」、「さよなき鳥-会話詩」は1798年であり、それより後の詩は1802年の「失意の頌詩」と1807年の「ウィリアム・ワーズワースへ」である。「ジョージ・コウルリッジ師へ」と「このシナノキの木陰はぼくの牢獄」が後続の詩に影響を与えたとすれば、会話詩の様式であることは明白だろう。ハーパーが指摘するように「感情の痛切さ、語りかけの親密さ、そして表現のやさしさ」(Harper 1975:190)が完璧に溶け合っているという様式である。1802年の「失意の頌詩」と1807年の「ウィリアム・ワーズワースへ」にも同種の様式が認められ、影響を与えた可能性を考えることができる。なおこのクラスタには宗教的な主題を扱った物語幻想詩である「老水夫の歌」も含まれている、

6. おわりに

本稿では、若き日の詩が後続の詩に影響を与えるかどうかの点について、クラスタ分類をもとに、テキストを読解して跡付けながら、可能性を考察した。クラスタ分類による類似性は、距離の類似性であり、因果関係を示すものではない。またはじまりがすべて若き日の詩からということを確認するものでもない。しかしながら、若き日の詩が年代の離れた後期の詩と近い距離にあり何ら

かの関連を認められるといういうことは、量的分析による発見の1つである。コンピュータによる分析は、ある視点にもとづく作品の見方と解釈の1つの方法を提供した。こうした試みが、イギリス・ロマン派の文学研究に1つの読みの可能性を提供していることを期待したい。

※本研究はJSPS 科研費 20 K 00453 の助成を受けたものです。

参考文献

- マニング, クリストファー・D, プラバカル・ラグヴァン, ハインリッヒ・シューチェ (2012) 「情報検索の基礎」 岩野和生, 黒川利明, 濱田誠司, 村上明子訳, 共立出版.
- A New Companion to Digital Humanities* (2016) Eds. by Susan Schreibman, Ray Siemens, and John Unsworth. West Sussex, UK: Wiley Blackwell.
- Coleridge, Samuel Taylor (1983). *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Biographia Literaria*. Vol. 1. Eds. by James Engell and W. Jackson Bate. New Jersey: Princeton University Press.
- (2001). *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Poetical Works*. Vol. 1. Poems (Reading Text). Ed. by J. C. C. Mays. New Jersey: Princeton University Press.
- (1969). *The Complete Poetical Works*. Vol. 1 and Vol 2. Ed. by Ernest Hartley Coleridge. Oxford, UK: Oxford University Press. Gutenberg Web Text. 15 September 2020. <http://www.gutenberg.org/files/29090/29090-h/29090-h.htm>
- Dobson, James, E (2019). *Critical Digital Humanities: The Search for a Methodology*. Urbana, Illinois: University of Illinois Press. Kindle.
- Fairer, David (2009). *Organising Poetry: The Coleridge Circle, 1790–1798*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Harper, George Mclean (1975). Coleridge's Conversation Poems. In M. H. Abrams (editor). *English Romantic Poets: Modern Essays in Criticism*. Second Edition. London: Oxford University Press. pp. 185–201. Kindle.
- Leuner, Kirstyn (2016). Whither Are We Bound: Romanticism in the Digital Age. The Annual Whalley Lecture at Queen's University, 2016. Web. 27 September 2020. <https://kirstynleuner.wordpress.com/2016/03/21/whither-are-we-bound-romanticism-in-the-digital-age-2016-whalley-lecture-queens-university/>
- Magnuson, Paul (2000). Coleridge's Discursive "Monody on the Death of Chatterton." *Romanticism on the Net* 17: No Pagination. DOI: <https://doi.org/10.7202/005900> ar. 27 September 2020.
- Moretti, Franco (2013). *Distant Reading*. London: Verso.
- TaDiRAH. Taxonomy of Digital Research Activities in the Humanities. Web. No Year. 28 Sep. 2020. <http://tadirah.dariah.eu/vocab>